The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高学歴社会の教育効果に関する実証研究 ： 高等教育の効果と学歴ミスマッチの影響
Author(s)	平尾, 智隆
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61845
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　平尾智隆　）	
論文題名	高学歴社会の教育効果に関する実証研究 ―高等教育の効果と学歴ミスマッチの影響―

論文内容の要旨

本論文は，高学歴社会における教育効果，具体的には，大学院学歴の労働市場効果，学歴ミスマッチとスキル・ミスマッチの生産性への影響，大学教育改革の効果を測定するものである。大学院学歴の労働市場効果，学歴ミスマッチやスキル・ミスマッチは，欧米において幾多の実証研究が行われてきたが，日本においてそれらが研究の俎上にあがることは少なかった。序章では，それらを日本の労働市場の問題として分析することの意義を解説する。

第1章では，ある就職情報会社との共同調査を通じて得られたデータを用い，新規学卒労働市場において大学院学歴が内々定の獲得に与える効果を統計的に検証する。ここでは，内々定の獲得において，文系大学生と比較した場合，理系大学院生の優位と文系大学院生の劣位が明らかになる。

第2章および第3章では，企業人事部に対して実施したアンケート調査のデータから，大学卒と比較した修士卒の処遇プレミアム（2章），修士卒と比較した博士卒の処遇プレミアム（3章）を分析する。ここでは，修士卒（博士卒）の初任給が勤続2年の大学卒（勤続3年の修士卒）より高い場合，初任配属においてより専門性が活かせる部署・職場に配属される傾向にあり，OJTを通じて無駄なく生産性を高めることで，結果としてより急な賃金カーブを描くことが示される。すなわち，人的資源管理における大学院卒の処遇プレミアムの存在が確認される。

第4章では，2時点（10年間）で比較できる企業人事部アンケート調査の個票データを用い，企業内における大学院卒の処遇プレミアムの変化を分析する。処遇プレミアムの存在はあるものの，その程度は目減りしていることが確認される。特に，文系においてその傾向が顕著であった。

第5章および第6章では，社会人大学院の分析を行う。実証分析に先立ち，第5章で生涯学習論の側面から社会人大学院について考察を行う。第6章では，社会人大学院の卒業生を対象にした調査から，教育内容と仕事内容の関連性が卒業後のキャリア形成や賃金に与える影響を統計的に分析する。分析から明らかになる最も重要な点は，社会人大学院での教育内容とそれを挟む仕事内容の一貫性である。この章の分析結果は，学歴の積み上げとして大学院進学をとらえるのではなく，社会人大学院進学の場合は，職業キャリアを形成していく過程の一環として戦略的に大学院教育を捉える必要性を示唆する。

第7章から第10章にかけては，学歴ミスマッチが賃金・労働意欲に与える影響を分析する。内閣府経済社会総合研究所が実施した調査のデータや就業構造基本調査の調査票情報を用いて分析を行う。その結果は，欧米を中心とした諸外国で数多く実施された先行研究と同じく，教育過剰（overeducation）の「負の影響」を示すものであった。日本のデータを使用した学歴ミスマッチの研究はほとんどなく，本論文はこの点において先駆的な貢献を果たす。

第11章では，スキル・ミスマッチが生産性につながる仕事満足や会社コミットメントに与える影響を分析する。スキル過剰者はスキル適当者に比べて仕事満足および会社コミットメントが低いことが明らかになる。「保有するスキル」と「就いている仕事を遂行する際に求められるスキル」との関係において，前者が後者を上回る場合，生産性を十分に発揮できないことによる意欲の低下と不満の拡大が起こるものと推測される。

第12章から第14章にかけては，大学教育改革の効果測定，具体的には，大学進学を選択する際に関係する入試広報の効果測定，生徒から学生への移行を支援する初年次教育の検証，就労意識の喚起を目指したキャリア教育がキャリア意識に与える影響を分析する。それぞれの分析において，大学教育改革が所期の目的を達成している可能性が示される。第14章においては，社会実験的な環境下での計測を行い，研究デザインの面でも工夫を行っている。

終章では，分析の結果を要約し，高学歴社会における教育と労働のあり方について，今後の課題を検討する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　平尾智隆　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	松繁　寿和
	副 査	教授	野村　茂治
	副 査	准教授	河村　倫哉

論文審査の結果の要旨

本論文は、主に日本の高等教育に関する教育効果を実証的にとらえようとした研究である。特に、大学院という学歴の労働市場における効用、学歴と仕事のミスマッチが生産性に与える影響や大学教育改革の成果の検証等の重要な課題を実証的に分析した数少なくかつ価値の高い研究が収められている。

構成は、序章、それに続く14の章と終章より構成されている。個々の分析においては、通常では手に入らないデータを集め、新たな研究課題に挑戦している点で評価される。例えば、第1章では、ある就職情報会社との共同調査を通じて得られたデータを用い、内々定の獲得において、文系学部生と比較して、理系大学院生が優位であるが文系大学院生は不利であることを明らかにする。

第2章および第3章では、企業人事部に対して実施したアンケート調査を用いて、大学院卒の処遇プレミアムの存在を確認している。2章では修士卒の、3章では博士卒の処遇プレミアムを分析し、修士卒（博士卒）の初任給が勤続2年の大学卒（勤続3年の修士卒）より高い場合、初任配属においてより専門性を活かせる部署・職場に配属される傾向にあり、さらにOJTを通じて無駄なく生産性を高めることでより急な賃金カーブを描くことを示す。第4章では、2時点（10年間）で比較できる企業人事部アンケート調査の個票データを用い、企業内における大学院卒の処遇プレミアムの変化を分析している。処遇プレミアムの存在はあるものの、その程度は目減りしていることが確認される。特に、文系においてその傾向が顕著であったことを発見している点は、政策的にも重要である。

第5章および第6章では、社会人大学院の分析を行う。実証分析に先立ち、第5章で生涯学習論の側面から社会人大学院について考察を行う。第6章では、社会人大学院卒業生を対象にした調査から、教育内容と仕事内容の関連性が卒業後のキャリア形成に重要であることを示す。

第7章から第10章にかけては、学歴ミスマッチが賃金・労働意欲に与える影響を分析し、欧米を中心とした諸外国で数多く実施された先行研究と同じく、教育過剰（overeducation）の「負の影響」を示す。日本では、学歴ミスマッチに関する先行研究はほとんどなく、本研究が先駆的な試みとなっている。第11章では、スキル・ミスマッチが仕事の満足度や会社へのコミットメントに及ぼす影響を観察し、「保有するスキル」が「就いている仕事を遂行する際に求められるスキル」を上回る場合、能力を十分に発揮できないことによる意欲の低下と不満の拡大が起こるとの結論に達している。

第12章から第14章にかけては、大学教育改革、具体的には、入試広報、初年次教育、キャリア教育の効果を測定し、大学教育改革におけるこれらの新たな試みが成果を上げていることを実証的に明らかにしている。特に、第14章においては、社会実験的な環境下での計測を行うなど、リサーチデザインの面でも工夫を行っている。終章では、分析の結果を要約し、高学歴社会における教育と労働のあり方について、今後の課題を検討している。

本研究は、現在の日本が直面している高度人材の育成における課題を浮き彫りにし、かつ、この分野の研究が進むべき方向性を示した点で注目に値する。また、収められた多くの研究は、すでに労働経済、キャリア分析、教育学、社会政策関係の専門雑誌に査読を経て掲載されており、研究の質の高さだけでなく申請者の研究の幅広さを保証している。

以上のように、本研究は貴重なデータを用いて高等教育研究の分野でこれまでにない貢献を行った点で高く評価でき、審査委員会は一致して提出された論文は博士（国際公共政策）の学位を授与するに値すると認定した。